

日蓮大聖人御書全集

ひょうえのさかんどのごしよ

兵衛志殿御書

しんぷにゆうしん こと

（親父入信の事）

新版
1492
〜
1494

ひようえのさかんのごしよ しんぷにゆうしん こと

兵衛志殿御書（親父入信の事）

こうあんがんねん

がつ にち

さい

いけがみむねなが

弘安元年（'78）

9月9日

57歳

池上宗長

ひさ

承

そうら

覚

束

そうらう

久しくうけたまわり候わねば、よくおぼつかなく候。

なに

不思議

たいふのさかんの

殿

何よりもあわれにふしぎなることは、大夫志殿ととのとの

おんこと

そうらう

御事、ふしぎに候。

常

様

よ末

そうら

しょうにん

けんじん

皆

つねざまには、代すえになり候えば、聖人・賢人もみな

隠

讒

人

佞

人

和讒

曲

理

もの

かくれ、ただ、ざんじん・ねいじん・わざん・きよくりの者

くに

じゅうまん

み

そうら

たと

みず

のみこそ国には充滿すべきと見えて候えば、喩えば、水

少

いけ 騒

かぜ吹

たいかい

静

すくなくなれば池さわがしく、風ふけば大海しずかならず。

よすえ

そうら

旱

魃

疫

癘

おおあめ

おおかぜ吹

代末になり候えば、かんばち・えきれい・大雨・大風ふき

重

そうら

ひろ

こころ

狭

どうしん

ひと

じゃけん

かさなり候えば、広き心もせばくなり、道心ある人も邪見

み

そうら

たにん

ふぼ

になるとこそ見えて候え。されば、他人はさておきぬ、父母

ふさい

きようだい

あらそ

獵師

鹿

猫

鼠

と夫妻と兄弟と諍うこと、れつしとしかと、ねことねずみ

鷹

雉

み

そうろう

と、たかときじとのごとしと見えて候。

りようかんとう

てんま

ほつし

しんぷ

さえもんのたいふどの

賺

良観等の天魔の法師らが、親父・左衛門大夫殿をすかし、

和

殿

原ににん

うしな

との

みこころかしこ

わどのばら二人を失わんとせしに、殿の御心賢くして

にちれん

諫

おん

ふた

輪

しゃ

日蓮がいさめを御もちいありしゆえに、二つのわの車を

助

ふた

あし

ひと

担

ふた

はね

飛

たすけ、二つの足の人をになえるがごとく、二つの羽のとぶ

にちがつ　いつさいしゅじょう　たす

がごとく、日月の一切衆生を助くるがごとく、兄弟の

おんちから

しんぷ

ほけきよう

い

たま

おんはか

御力にて親父を法華經に入れまいらせさせ給いぬる御計

きへん　おんみ

らい、ひとえに貴辺の御身にあり。

しんじつ

きよう

おん

理

よすえ

ぶつぼう

また真実の經の御ことわりは、代末になりて仏法あなが

乱

だいしようにんよ

い

み

そうろう

たと

ちにみだれば、大聖人世に出ずべしと見えて候。喩えば、

まつ

霜

のち

き

おう

み

きく

くさ

のち

せんそう

み

松のしもの後に木の王と見え、菊は草の後に仙草と見えて

そうろう

よ

治

けんじんみ

よ

みだ

候。代のおさまれるには賢人見えず、代の乱れたるにこ

しょうにん

ぐにん

あらわ

そうら

へいのさえもんどの

相　模

そ聖人・愚人は顕れ候え。あわれ、平左衛門殿・さがみ

どの

にちれん

もち

そうら

過

もうここく

殿の日蓮をだに用いられて候いしかば、すぎにし蒙古国の

ちようし

頸

き

そつら

悔

朝使のくびはよも切らせまいらせ候わじ。くやしくおわす
らん。

にんのうはちじゆういちだいあんとかくてんのう

もう

だいおう

てんだいざす

みよううんとう

人王八十一代安徳天皇と申す大王は、天台座主・明雲等

しんごんしとうすうひやくにん 語

みなもとのうししょうぐんよりとも

じようぶく

の真言師等数百人かたらいて、源右将軍頼朝を調伏せ

かえ

ほんにん

つ

みよううん

よしなか

き

しかば、「還つて本人に著きなん」とて、明雲は義仲に切ら

あんとかくてんのう

さいかい

しず

たも

にんのうはちじゆうに

さん

し

れぬ、安徳天皇は西海に沈み給う。人王八十二・三・四、

おきのほうおう あわのいん さだのいん とうぎん いじようしにん ざす じえんそうじよう

隠岐法皇・阿波院・佐渡院・当今、已上四人、座主慈円僧正・

おむろ みいとう しじゆうよにん こうそとう

へいししょうぐんよしとき

御室・三井等の四十余人の高僧等をもつて平将軍義時を

じようぶく

たも

かえ

ほんいん

つ

調伏し給うほどに、また、「還つて本人に著きなん」とて、

上かみの四王しおう、島々しまじまに放たれ給たまいき。

だいあくほう こうぼう じかく ちしょう さんだいし ほけきようさいだいいち

この大悪法だいくそんは、弘法きんげん・慈覚やぶ・智証ほつけさいだいにの三大師さいだいさん、法華經最第一だいにちきようさいだいいち

の釈尊しやくそんの金言きんげんを破やぶつて法華最第二・最第三、大日經最第一

よ たま びやつけん ごしんよう こんじよう くに み

と読み給たまいし僻見びやつけんを御信用ごしんようあつて、今生こんじようには国くにと身みとを

亡む 亡む げしよう むけんじごく お たま

ほろぼし、後生ごしょうには無間地獄むけんじごくに堕ち給たまいぬ。

こんど ちようぶくさんど いま わ でしとう し

今度はまた、この調伏ちようぶく三度さんどなり。今いま、我が弟子等わがでしとう、死しし

ひとびと ぶつげん み たも いのち

たらん人々ひとびとは仏眼ぶつげんをもつてこれを見給みうらん。命いのちつれなく

い まなこ み こくしゆとう たこく せ

て生きたらん眼まなこに見みよ。国主等こくしゆとうは他国たこくへ責めわたされ、

ちようぶく ひとびと くる じ たこく

調伏ちようぶくの人々ひとびとは、あるいは狂い死くる じに、あるいは他国たこく、あるい

さんりん 隠

きようしゆしやくそん おんつか

に ど

小路

は山林にかくるべし。教主釈尊の御使いを二度までこう

でしとう

牢

い

ころ

じをわたし、弟子等をろうに入れ、あるいは殺し、あるい

がい

ところ

くに

追

ゆえ

とがかなら

は害し、あるいは所・国をおいし故に、その科必ずその

くにぐに

ばんみん

み

いちいち

びやくらい

国々・万民の身に一々にかかるべし。あるいはまた白癩・

こくらい

もろもろ

あくじゆうびよう

ひとびと 多

わ

でしとう

黒癩、諸の悪重病の人々おおかるべし。我が弟子等、

よし

ぞん

たま

きようきようきんげん

この由を存ぜさせ給え。恐々謹言。

くがつここのか

九月九日

ふみ

べつ

ひようえのさかんど

そう

日蓮

花押

にちれん

かおう

わ

いちもん

この文は、別しては兵衛志殿へ、総じては我が一門の

ひとびとごらん

たにん

き

たも

人々御覧あるべし。他人に聞かせ給うな。